

農林水産業人材確保・育成戦略検討委員会 第2回分野横断会議 議事要旨

1 日 時

令和6年9月3日（火）9：30～11：30

2 場 所

京都府庁 3号館 第6会議室

3 出席者

別紙のとおり

4 内 容

（1）開会あいさつ（鈴木副知事）

近年の環境変化により、農林水産業が担ってきた安全保障としての食料確保や緑地保全といった機能などについての重要度は増しているが、従来のままではなかなか解決できない状況にある。京都府は、これまでからイノベーションを起こし続けることで歴史・文化に育まれた風土や経済を形成してきた特色のある街である。農林水産業を超えて、国際的な視点、経営の視点、リカレントをはじめとする人材育成の視点など様々な分野の皆様からの意見をいただき、人材育成に関する具体的な施策や府民への届け方を検討していきたい。また、本戦略を策定し、京都から課題を解決していくための方向付けを世界に向けて発信していきたい。是非、活発に御議論いただくようお願いする。

（2）報告事項

（事務局）資料1により第1回分野横断会議及び分野別会議の概要について、資料2により第2回分野別会議の概要について報告。

（3）議題

（事務局）資料3及び4により京都府農林水産業人材確保・育成戦略(中間案)について報告

○水産業を漁業へ変更すると説明があったが、違和感がある。3つの産業の様々な担い手の確保と育成をターゲットとする中で、多様化しているルートをモデル化して明示することが必要。そのためには、それぞれの製品のブランド価値を高めて見せていく必要があると感じているが、漁業であれば、魚介類だけではなく、それを加工したのも京都の産品として価値が上がると思うので、加工も含めた方が良いのではないか。

（事務局）漁業を行う上で加工業としっかり連携していく必要がある。一方で、水産加工業に携わる方の人材育成までは踏み込まず、一次産業の漁業でいかに経営を多角化していくかという中で水産加工も含めた育成の仕組みを作っていくことを考えている。いただいた御意見は改めて検討させていただきたい。

○よくまとめていただいている。方向性も良いと考える。育成のターゲットを絞り込まなければという意見があったが、農業部門について言うと、専業農家を育てる政策も必要だが、他方で半農半 X も含めて地域を支える人材も必要であり、それがきちんと盛り込まれていると思う。一方、間口をどうやって広げてくのか、抜本的に強化していかなければ、全国的にも新規就農者が減っていく中で、京都だけ担い手を確保していくのは難しいと感じる。

また、全体的に「農協」という単語があまり出てきていない。近年では、J Aにのくのに万とう部会は成功事例と思う。部会の特徴は、先輩農業者が技術指導を行い、風通しが良く、就農者が入りやすい体制を作っており、生産量が減りつつあったところを盛り返している。J Aなどの地域の団体を巻き込むことが重要と感じている。

○内容については良いかと思うが、戦略はあくまでコンテンツと考えるため、これをどう発信するか、若者の心を打てるか、魅力を感じ飛びついてくれるのかどうかが大切。最近の学生にとっては、ライフワークバランスがキーワード。若い人たちをどういう風に取り込んでいくか、情報発信を含めて、若者の気持ち、立場になったような発信方法、実施方法を考えていく必要がある。

○人材の確保については、マスのプロモーションと、卒業生が自らの経験を伝えて一本釣りしていく、この二本立ての戦略をつくっていくと良い。前回、人材のエコシステムという話をしたが、卒業生を教官として採用するシステムも良いかと思う。また、人間は心理的な部分が多く、例えば農林水産業は大変というステレオタイプの認識がまだ残っていると感じる。実はそうではなくなりつつあり、最先端の技術を駆使し、将来、明るい領域であるということを、ターゲットになる方々に知っていただく必要がある。さらに、農林水産業が一体化して、異分野の人とも連携しながら進めていくことで高度技術人材の競争になる。閉鎖された社会の中で外とつながっている人をハブとして情報が行き来し、それにより内部の人たちを感化し、発展していく。そういった人材をつくるようなことや異分野との情報共有、情報発信ができる仕組みを是非、やってほしい。

○漁業という表現以外は異論なし。具体的策は林業と漁業でレベルを合わせて膨らませる必要がある。援農マッチング事業について以前、府の関係の方から本事業について説明いただいたが、面白そうな事業と感じた。仕事をしながら、体験したい人も多く、そこから将来的な担い手につながっていくのではと思っている。一方で、どう伝えてどう表現していくかが非常に大事という意見があったが、府のHPでは淡々と描いてあり、魅力を感じにくいいため、興味をそそる形で表現していただけたらと思う。

○今年に一次産業をシーズにしたスタートアップを輩出することを目的としたローカリス

タートアップ協会を設立し、宮崎でサミットを開催した。一次産業という言葉を出すと、生産者以外はだめという、固定概念を持たれる。当初、一次産業サミットと言っていたが、人が集まらなかったため、一次産業に関係ない人はいないという考えで、ワンサミットという言い方に変えたら集客の流れが変わっていった。やはり見せ方、言葉の作り方による影響は大きいと体感した。そのイベントでは、全国の30〜40代の生産者でも突出した人たちが多く集まり、わくわく感があり未来は明るいと感じさせられた。そういった突出した方々も、このような分野横断的な場がありがたいと仰っていた。分野は異なっている、ベースとして流通、マーケティング、ブランディング、広報など、共通した課題があると思うので、そこを横断型でやる意味はある。また、京都府内でも面白い突出したスターを作っていくことをやると、そういう人に憧れて入ってくるということも起こりうるので、そういう仕掛けがあれば良いなと感じた。

○内容としてはよく網羅されていると思うが、具体的にどうやっていくのというところ。人材育成センターが拠点となって、人材ネットワークによる組織的な連携を行う中で、誘導段階というのはすごく大事。人材育成のターゲットは一次産業だが、キックオフのイベントなどでは、実際に食べていただく方、作る方、加工業者、色々な方がいた方が、結果的に自分が作ったものがどのように生かされているか、こうやったら儲かるのでは、などというところにも繋がる。また、野菜と魚は日本人が食べなくなってきたものだが、健康に良い食材。色々なことを考えながら、夢のある話に持っていくことが誘導段階や色々な人を誘致していく際にも重要かと思う。

○戦略を作る上で、類似の農林水産業の人材育成のための戦略は他の都道府県で作られているか？他の国でも類似の戦略、政策文書があるなら、色々と参考になるだろうし、府の特徴がどんなものかが比較すると見えてくる。京都府と友好関係にある海外の省庁などつながりの深いところも参考になるだろうし、他府県の事例も比較すると、我々の議論で抜けているところがあるかもしれない。

○京都の1つの特徴は大学の多さと思う。府内からではなく府外からもたくさん来られる。それを捉えるのも京都らしさの表現のひとつかというようにも感じる。

○人材育成機関は、主に高校を卒業した人をターゲットとしていると思うが、自分の経験からその時に、何になりたいかといわれると、こうなりたいというものはなかった。どこの分野に行くかまだわからない人に対し、大学で言うと教養学部みたいなものがあったとしても面白いのでは。広く考えると京都府の中で農林水産業全体の人材を確保する、その中で最初の1年で適性、希望を見極めたうえで選択していく、違ったなと思ったらシフトできる、ということが一体でやっていくことのメリットの1つかと思う。

○これまでの議論の中で、わくわく感や未来は明るいといったイメージがある一方、心理的なハードルがあるという意見もあった。かなり両極端のイメージがあるが、この差はなぜ生まれるか、どういう状況で生まれてくるのか？

○かなり突出した方は、最初からそこを目指していた人ではないことが多い。外部での経験をして、日本の農林水産業のポテンシャルや面白さに気付いて、入ってこられた方がほとんどと思う。早い段階から決めていくと、あまり外の世界が見えなかったりするので、そういう意味でも、横断型は意義がある。我々からすると、農業をずっとやっている人は、隣の林業だったり、水産と林業だったり、もっと知識的にもつながってやっているのかと思ったら、そうではないということがわかった。学校の中でもカリキュラムに入れられるかは別として、外部の知識を入れられるような場を入れていくことが必要かと思う。

○外部にいた人が、自分のことを発揮できる、つまり農林水の情報に触れる機会があるかどうかだと思う。今の農林漁業に対して正しい情報が発信しきれていない。我々の研究開発の中で、3事業は非常に良い先端技術の適用先と考えている。一方で、まだニーズを把握できていないので情報発信をしてほしい。我々の技術を使っていただいて少しでも楽な事業、この業界は最先端であり心理的な壁が下がって、いい人材が入るという好循環が生まれることのお手伝いができたらと思う。

○京都らしさって何なのかというところの発信ができていないと感じる。京野菜や宇治茶などブランド化できているもののように、京都らしさをもっと作っていかないと。他の自治体と同じような発信をできてはいけない。

○農業は魅力を感じるものもあるがハードルが高いということに対して、魅力的な農業経営者に触れる機会があるかどうかが大きいと感じる。実際にそういう経営者の素晴らしさと触れることで、農家と関係ない学生が、働くことを決める事例も多い。例えば就業フェア、農大で素晴らしい経営者の人を呼んできて、表に出して魅力を伝えていくのが重要。そういう人は6次産業化も含めて食の分野にも入り込んでやっている方が多い。また、有機農業を言葉として入れてもらったのは良かった。国が推進しているだけでなく、半農半X的な人や地方に移住する人も農業の世界に入ってくる可能性がある。アンケートを取ってみると、有機農業や自然農法志向が大半。周りに迷惑をかける可能性もあるので注意が必要だが、京都府に行けばそういうことをやっているということが広く周知されれば、Iターンでやってくる人も増えると思う。

○女性の支援、ジェンダーの記載が少ないと感じる。地域を支える、移住定住を進める上で

非常に重要。可能ならもう少し記述を増やしていただけたらと思う。

○移住して、ワークライフバランスを考えたときに、女性が農業等を行いながら家庭や教育もできるようにということを目指してほしい。また、記載はなかったが、京都府の農業女子のネットワークもあると聞いているので、そういうところも盛り込んで普及啓発をしてほしい。

（座長まとめ）最初に鈴木副知事のご挨拶の中に、戦略の中身をどう落とし込むか、届け方がとても大事であるという話があったが、この点は実践的な側面で戦略が活かされる際に留意すべきであると思う。司令塔になるべき人材確保育成センターに加え、JA、漁協、市町村、大学、地域の色々な団体がたくさんある中で、それらをしっかり巻き込んでいくようなことも大事という指摘もあった。多くの関係機関がいる中で、上意下達の命令系統は成立しないと思われる。トップダウンではなく、関係機関の共同実施体系（コ・マネジメント）をきちんと成立させることが必要ではないかと思う。その中で、関係機関との間で戦略の共有が必要になってくるし、責任の分担の明確化も必要になってくるだろう。そのためには、関係機関間のコミュニケーション力や信頼される関係づくりが求められていると思う。

また、本日の議論の中で、府の施策を受け取る側（育成される人材）の見方で関連施策を見直すと、また違ってくるように感じた。育成される人材側から、もう一度施策の整合性を検討していただく必要があると思う。

最後に、話題に出てなかった点について指摘しておく。総務省の地域おこし協力隊、集落支援員の取り組みや連携という話についても議論にあっても良いと思う。また、人材が不足する中、外国人材の活用についての府の方針も記載があって良いかと感じた。

（４）閉会あいさつ（小瀬部長）

色々な意見をいただいたが、我々が気付けていなかった観点心理的なハードルをいかに下げていくかというところ重要な視点と思う。その中で、農林漁業をどの範囲でとらえていくのか、いろいろな分野との連携についてこの戦略でどこまで触れていくのかというところは議論していきたい。

いよいよ具体的な施策への落とし込みに入り、来年できることは何かという議論を並行して進めていきたい。地域おこし協力隊は農山漁村を守る担い手を育成する上で非常に重要であり、戦略に落とし込んでいきたい。外国人について府としてのスタンスはしっかり持っておかないといけないと感じた。いただいた意見を基に中間案をブラッシュアップ、議会で報告しながら、改めて分野別、分野横断会議で報告し、まとまりのあるものにしてきたい。